あすを植えよう

# 新しい文明築く公共事業

哲学者　梅原猛さん　対談　横浜国大名誉教授　宮脇昭さん

各地で広まりを見せる「ふるさとの森づくり」活動。それは森の自然を再生するとともに人間の心の回復につながり、引いては近代文明を超えた新しい文明を築く公共事業といえる――。科学技術文明の行き詰まりを指摘し、森の文化復活を提唱する哲学者の梅原猛さん(79)が、独自の植物生態学理論で森づくりを指導している横浜国立大学名誉教授の宮脇昭さん(76)と語り合い、こう述べた。

【司会は毎日新聞東京本社代表室次長・恩田重男、写真は大阪本社写真部、西村剛】

## 森は日本のシンボル　梅原さん

――梅原先生は京都・東山のふもとにお住まいと聞いています。

梅原さん　そうです。若王子というところです。後白河法皇が熊野詣でに行けない時、代わりにお参りした場所です。後白河法皇は熊野詣でに熱心で毎年のように詣でました。この熊野詣でというのをどう考えるか。非常に難しい問題がありますが、私は、神様が住んでいる原始の森に戻ろうとした文化現象だと思うんです。その神様は決して天皇の祖先というのではなくて、森であり、山であり、川である自然の神。日本人が、外来の文化より先の、自分たちの文明の奥にある縄文の世界に戻っていった。そういう熊野詣でに縁のある場所です。足利義政も愛でたところで、そこに銀閣寺を作ろうとしたが、土地が狭いから今ある地に建てたともいわれます。

――1974年からお住まいのようですが、森が深いのでしょうか。

梅原さん　ええ。和辻哲郎さんが一時住んでおられて、そのあとに私の親せきの画家が住んでいたが、亡くなって、遺族が私に住んでほしいということで買ったんです。イノシシやタヌキ、キツネもサルも出る、まさに自然の森の王国です。そこに30年、大変優雅な生活をさせてもらっています。時々散策しますが、やはり森というのは日本のシンボルじゃないかと思いますね。文明国で国土の3分の2が森で、その森の4割がほぼ原始林であるような国はありません。

――森に対しては、都市の生活で邪魔者扱いする見方があり、防犯上の問題もいわれます。森、あるいは森づくりをどう考えますか。

## お化粧的緑化、脱却を　宮脇さん

宮脇さん　日本人は戦後、技術による規格品づくりが非常にうまくいったために、木を植えて森を作る場合にも、まず木材生産のための規格品づくりが進められた。それは今後も大事だろうが、問題が出ている。もうひとつは、都市砂漠に住んでいる人たちは、生物的な本能で緑を、森を欲するが、今まではお化粧的な緑化であり、緑づくりでした。32年前に梅原先生と初めて対談した時に、私は日本中を回って、朝から晩まで現地調査をしていた。森が少なくなっていると実感した。梅原先生がいわれたように、国土の六十数%は林野といっても、厳密な意味で言う、土地本来の森が残っているところは、我々が調べたところでは、大部分の日本人が住んでいる照葉樹域では0・06%しかない。本物の森が失われてしまっているのです。

我々が取り組んでいるのは、その土地本来のふるさとの木によるふるさとの森づくりです。梅原先生がおっしゃる縄文時代の森であると同時に、今後1000年残る森づくりを目指しています。

植物の世界にも偽物が横行している。現場に行けば、自然の森が発している本物の情報がある。梅原先生のご自宅の裏のようなところですね。その自然の発しているかすかな情報から見えない全体をどう読み取って、その土地本来の森をつくるかです。その際に大事なのは、主役を間違えないこと。潜在自然植生といっていますが、これは現場で調査をしなければわかりません。偽物は見かけがいいが、長持ちしません。桜も竹も梅も松も大事ですが、土地本来のものは、梅原先生も主張している照葉樹林文化の照葉樹林帯ではシイ、タブ、カシ類なんです。

開発地域やニュータウンで木を植えて、少し大きくなると、日陰になる、し虫も来る。落ち葉が落ちるし枝が邪魔だから切れという。生物社会は自分だけでは生きていけないのです。少々嫌なのがいても我慢して生きていくことが、自分が生き延びていくための基本ですが、今は自分だけが、自分の属する党派、派閥、仲間だけがよければいいと、皆殺しが行われている時代です。

そういうものにどう対応していくか。私たちは木を植えながら、若い人も皆協力して汗を流す。皆さんが本能的に夢中で植えていただいているが、それを精神的に、ひとつの魂の基盤として、皆さんに最低限の共通の理解を持っていただくことが大切です。植物が好きでなくても、専門でなくても、未来のために、今木を植えなければいけないという、研ぎ澄まされた生物的な感性と知恵、先見性と決断力、実行力、持続力です。日本古来の、自然と共生した哲学というか考え方を最低限の基盤にして、ものの見方、考え方を見直す必要があるのではないでしょうか。

ことば　潜在自然植生　すべての人間活動を停止した場合の、その土地本来の緑のこと。元々の森は、家畜の過放牧や火入れ、農耕、都市化などによって失われており、今の緑は、人間によって厚化粧を施された姿といえる。化粧を取り除いた本物の素肌、素顔がどんな状態であるか、現場で自然の発するかすかな情報をもとに読み取ることが大事。ちなみに日本列島の潜在自然植生は、ほとんど森である。

## 自然を征服、善なのか　梅原さん

――梅原さんは日本の文化の基層をなしているのは縄文文化であり森の文化であると著作で述べていますが。

梅原さん　私は、近代西洋の文明を推し進めた哲学は間違っていると思います。科学技術そのものはどうしても人類に必要なものだが、科学技術を推し進めた哲学は間違っていると思う。デカルト、ベーコンの哲学の考え方だが、自然は人間に対立してあるもの、その自然の法則を知ることによって、人間は自然を征服することができる。自然を征服することが絶対的な善である、それが歴史の進歩であるという考え方。これが決定的に間違っている。それによって自然科学は発展し、技術が発達し、近代以前には考えられないような富を得ることができたが、その代わりに自然破壊は急速に進みました。そのような環境破壊にブレーキをかけないと人類は生きていけないことがやっとわかり始めてきた。しかしそれはまだ、当分先であろうと、自分が生きているうちは大丈夫だろうという一種の安心感があって、なかなかそういう環境破壊を止めようとしない。それが今の人類の姿だと思いますね。ですから、私は確固たる哲学を、デカルト哲学に代わるべき哲学を作らないといけないと思っています。

それから、宮脇さんが言われたように、森が荒れているんですよ。このごろ私は円空という人に大変興味を持っているんです。円空は森の木から仏像を作った、まさに森の芸術家ですね。森の洞くつみたいなところに住んだ変わった芸術家だった。今、円空の作った仏像があちこちで見られる。

先日、岐阜県郡上郡の山の中に行きましたが、かつてそこに小学校があり寺があって円空仏があった。過疎が進んで人口が10分の1になった。聞いてみると、植林したがその木が売れないんだそうです。以前は雑木林があっていろいろなキノコが採れ、いろんな動物もいてなんとか食べていけた。今は売れない植林のために離散してしまった。そういう森を見ると荒れていて、10年くらい前の台風で倒れた木がそのままになっている。森が泣いているという感じです。荒れたままに放っておいては日本人の魂がよくなることはないと思いますね。

縄文時代は日本中が木に覆われていました。これは日本だけではなく、ヨーロッパもそうだと思います。ところが、農業が発展してきて木を切りだした。ヨーロッパは小麦農業ですから、徹底的に木を切ってしまう。結局、山が枯れてしまって、雨が降ると土が流れて、岩山になってしまう。そういうところを旅すると、文明が自然を、森を滅ぼしたのだと実感します。一方、日本の稲作文明は水がいるんです。森林は水を蓄えますから、森を大切にしたんですね。森は耕作に必要な面積しか壊さないようにした。しかも森には神様がいる。神社には必ず森を残した。神社に森があるのは日本人の常識なんですね。これは縄文の信仰が弥生時代以降も残っていたんだと思う。神様が森の中にいるという信仰が残ったんですよ。

柳田国男によると、山の神は田植えと同時に田の神になり、そしてまた稲刈りとともに田の神が山の神になるという。山の神と田の神が一緒なんですね。江戸時代まではそれができた。それが近代になって忘れられてしまって、西洋と同じように森を切ってしまった。それまで先祖が持ってきたような信仰を忘れてしまって、生産だけを考えて植林をしてしまった。ここに基本的な間違いがあると私は思います。私は日本の森を再生することが、近代文明を超えた新しい文明の公共事業だと考えます。ダムを造るということではなくて。

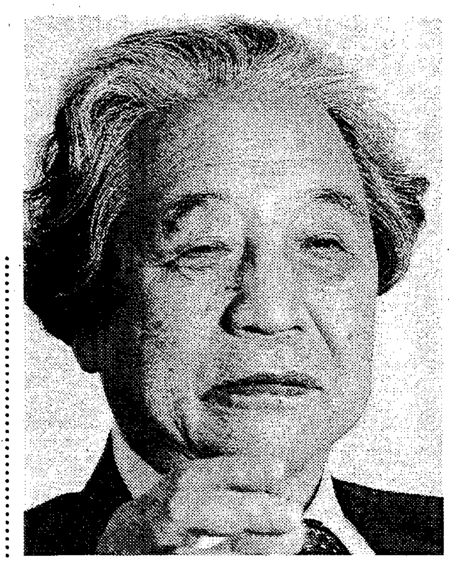
## 鎮守の森、世界に発信　宮脇さん

――お二人の前の対談から30年余り。この間、宮脇先生は国内外で1200カ所を超える数の植樹を指導してこられましたが、地球環境の危機的な状況に変化はありますか。

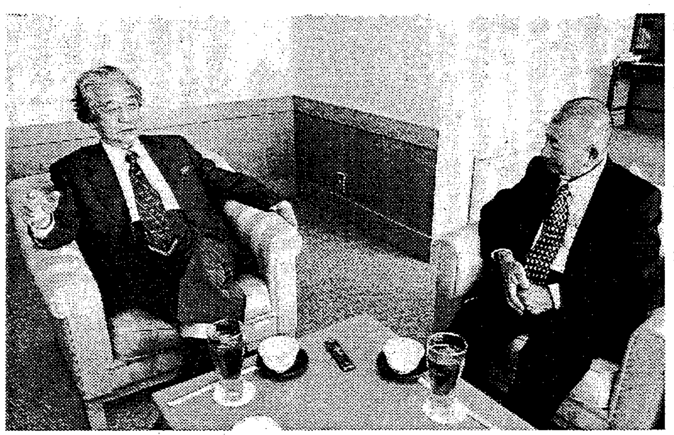
宮脇さん　前回の対談では梅原先生からご声援を受けて、森をつくらなければいけないというところで終わっていた。以来いろいろなところでつくらせていただいた。その前に、今梅原先生が触れた日本人の森への考え方について話したい。

97年に米ハーバード大学で「神道とエコロジー」という国際シンポジウムがあって日本から120人、世界の神道学者が400人くらい集まって4日間議論した。私は招かれて「鎮守の森を世界の森に」という演題で基調講演をした。宗教者も祝詞やお経だけでなく、社会に出なければいけないという話をした。その夜、レセプションで同大教授の社会学者、エズラ・ボーゲルさんが私の肩をたたいて話し掛けてきた。「私が60年代にジャパン・アズ・ナンバーワンという本を書いたときにアメリカ人はお前は頭がおかしいのではないかと言っていたが、そのあと日本はアメリカがねたむほど発展した。しかし今は、経済も国も地方公共団体も家庭までもがだめになった。やはり私は間違っていたのかと思っていたが、今日あなたの言う鎮守の森の話を聞いて、その森づくりを市民を主役に続けていけば、日本は再び世界のナンバーワンになるのではないか」と言って握手してきた。また、ある西欧の神道学者が「今の日本人は不幸だ。4000年の歴史を持った日本の自然の森と共生してきた神道が、最近100年足らずの間に、一部の人に間違って悪用されたために、今やもう鳥居も神社も鎮守の森すらも違和感を持たれてしまった。これは極めて不幸なことで、日本人は見直さなければならない」と言ったのが非常に印象に残っています。

木を植えるというのは心の問題で、単に防災や環境保全、水源管理のためだけではありません。一度体験すればわかってもらえますが、ほとんどの人は残念ながらわかってもらえず、木が育てば邪魔者扱いです。日本人の心を取り戻さなければなりません。



梅原　猛さん（うめはら・たけし）　1925年、愛知県出身。京都大学文学部哲学科を卒業後、立命館大学教授などを経て京都市立芸術大教授、同学長、国際日本文化研究センター所長、日本ペンクラブ会長などを歴任し、現在は同センター顧問。99年に文化勲章を受章。72年度の毎日出版文化賞を受賞した「隠された十字架　法隆寺論」などを通し、歴史、宗教などで大胆な仮説を提起。縄文文化や仏教、神道などの宗教を通して日本文化の原点を探る研究を続けている。「水底の歌」「ヤマトタケル」（戯曲）「京都発見」など著書多数。



対談する梅原猛さん（左）と宮脇昭さん＝京都市内のホテルで